
とある『亡者復活』＜アンデッドメイカー＞の日常

千葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある『亡者復活』＜アンデッドメイカー＞の日常

【Nコード】

N1886P

【作者名】

千葉

【あらすじ】

学園都市には八不思議がある。

その中には「夜な夜な歩く亡者の存在」という科学技術の粋が集まる学園都市には似つかわしくないものが……

さてさてそれが本当であるか、嘘なのかは一人の少年にかかっているといってもいいだろう。

亡者を従えるという彼を知るための物語が今始まる

始まりの為の始まり（前書き）

また二次創作小説を書き始めました千葉です。
以前の作品とは書き方を変えてみました。

この小説を見て楽しんでいただけたら幸いです。

始まりの為の始まり

全国で大多数の高校生が歓喜の悲鳴をあげる夏休み。その夏休みも少年にとっては自らの研究の為に与えられたものであつて遊びの為にあるのではなかった。ある人物への復讐のために、彼は超能力の為に実験をしていたのである。

超能力と聞くと信じられないかもしれないがここ学園都市ではそれが当たり前のように存在している。透視能力や念動力の有名なものから、発火能力や風力使いのようにより知られていないような能力も、静脈にエスペリンを打ち首に電極を貼り付けて、イヤホンでリズムを刻めば誰でも能力者になれる。その優劣さえ問わなければ

……

雉旗きじはた やしろ 社はその日も学生寮の一室に籠こもっていた。雉旗 社は緑髪で切れ長の目の割に柔らかい表情をしているので、周りの人間は大人しく優しいという評価をしているがそれは概ね正しい。何故なら彼は普段そのように振舞っているから。

しかし彼は休日になるとこのように部屋に閉じこもる。それには秘密があるからだ。

カーテンを閉め切っているので手元を照らすための照明を、その照明さえも学園都市で最新の自分の手で影が全く出来ない特別な物で、学生ではとても手に入りそうもない一品だが、義理の両親から金だけは送られてくるので社やしろにとってはそんなに苦のある買物でもなかった。それだけ見ればまだ普通だが、異質なのはその机の上に散らかっている物だ。

研究用のマウスの死体。それが三匹。

いつもマウスの死体をメスで切り裂く感触はたまらない。毛の生えた皮膚を、肉を、脂肪を切り裂く時に得る快感は自慰のそれを凌駕する。行動に必要な臓器以外と目玉から視神経までを全て取り除き、これもまた学園都市の高画質盗撮用ピンホールカメラを目に埋め込み手術用の縫合糸で皮膚を再び縫い合わせる。

このような物は手に入りにくいと考えるかもしれないがこれらは学園都市のある店が格安で取り扱っているので割りと簡単に手に入る。もちろん一般価格よりは高いがそれでも良心的な値段と言えるだろう。

皮膚が剥れてないか一通り確認すると、次のマウスにも同じ作業に取り掛かる。

そのまま一時間ほど作業を続けてようやく全てのマウスに同様の改造がすんだところでさすがに空腹を覚え、時計を見ると昼の三時を示していた。冷蔵庫を調べたが冷凍のマウスと学校で貰ったあくまで体の調子を整える為の錠剤^{錠剤}ぐらいしかないので外で食べようとドアを開けたところ、ちょうど隣の家のドアも同時に開きその人物と顔を合わせた。

「よう社^{やしろ}じゃねーか、これから飯食いに行くんだが一緒にいかなーか？」

現れたのはツンツン頭の黒髪少年、上条当麻だ。同じ学校の同じクラス同じ寮、という関係でいわば友人。もう一人この寮に住んでいる友人がいるのだがそれはまた後にしよう。

「そうだね。僕も今から行くとこだったんだ。」

休日に当麻の顔を見るなんてテンション下がるけど頑張るよ!」

「何ですか、上条さんはそんなに不景気な顔してますか?」

ただでさえ不幸な上条さんは社の発言に

毒沼並みのダメージでジワジワHPを削られていますよ!」

まあ、何はともあれ飯を食いに行こうという訳で近くのファミレスに行くことにした。

当麻はしばらく財布の中身と相談した結果一番安い豚の生姜焼き定食にしたが、自分は全然金に困ってないのでドリンクバーとステーキ定食、ストロベリーパフェという一人暮らし舐めてるだろという物だった。

「相変わらずいいもん食ってんな」

「当麻より高価な物なんて僕食べたことないから」

「笑顔で嘘言うんじゃない!」

このテーブルの上だけで俺のエンゲル係数を遥かに超えていると思うぞ!」

この店ではご飯のおかわりが自由なので、当麻は豚の生姜焼きをチマチマと食べてはご飯をかきこむなんて卑しい真似をしている。ようやく食べ終わると当麻はスーパーで特売やっているからと言って別れたが、どうせ特売やっているスーパー間違えた!とか言っただけで不幸な目にあうんだろうなと考えながら社は家に帰った。

家の中でも嚴重に鍵をかけた場所、そこに研究室と呼ぶ場所がある。机の上に並んだ改造マウスへと視線をやった後手を当てると、マウスの体から紫色の炎のようなものが上がりだす。

328571人いる能力者でも雉旗（きじはた）社の能力は異能だ。彼の能力『アンデッドメイカー亡者復活』は有機物だったものを再び蘇らせ操るというもので、学園都市の書庫バンクにも乗ってない。

学生の能力レベルを測定する身体検査で何故社の能力が登録されていないかというと、社は念動力使用だと思われているからだ。何しろ死体だけを操るなんてそんな限定された能力があるはずが無いと、頭の凝り固まった上のお偉いさんは思っている。実力を隠したい社にとってもそれは喜ばしいし、レベル1という低い扱いを受けたことによって当麻たちと友達になることができたのでそれなりに現状に満足している。

紫色の炎は自分以外には見えないらしく、この炎が出ている時間はその死体の大きさや能力と比例して長くなり蜘蛛などの虫なんかはあっという間に終わるが、小さいとは言えマウスは思考が複雑な哺乳類なのでしばらくの間燃えた後、足がピクツと動き行動を始めた。

マウスはしばらく机の上をウロウロすると自分を蘇らせた社ヤマトに気づいたらしくピンホールカメラの目でこちらをジッと見つめ命令を待っている。

レベル2の今ではマウスのような小型の哺乳類を操ることが限界だが、将来は人間の死体さえも操れるようになれるだろう。

今は力をつける時だ。あの男に復讐するために……

終わりの為の始まり（後書き）

細かい設定などは後々書いていきます。

なるべく早く更新したいな

炎の魔術師との戦闘(1)(前書き)

早くもお気に入り登録してくださりありがとうございます。

これからも頑張って書きます。

炎の魔術師との戦闘（１）

社には本当の両親がいない。数年前に死んだのだ。いや、殺されたというのが正しいか

社の父：雉旗 現介は量子力学の権威で、多数の学説を発表し常に周りから評価されていた。当然、政府の研究施設からもオファーが来ていたのだが父はそれをよしとしなかった。科学は真理を解き明かす為にあり、以前からきな臭い噂のあるその政府の研究施設で働くことで科学技術の悪用を恐れたからだ。

研究熱心で滅多に家に帰らない父に対し最低な男という評価を下していたがその信念だけは認めてやってもいい。

母はそんな夫に対し文句も言わず

「いずれ分かるわ」

と諭すように幼き日の社に言い聞かせていた。社は母を敬愛していたので時々研究が終わって帰ってくるやいなや、家族に碌な挨拶もせずにベッドに倒れこんで寝る父を見ると家から追い出したくなる衝動に駆られたが、母の手前そういう行為は憚れた。

そして毛布も掛けずに寝た父に優しく毛布を掛ける母に崇拝にも似たような感情を抱いていたのだ。

ある日、父がいなくなった。父と同じ職場の人間から電話がかかってきてそのような旨を伝えられた母は見るからに動揺した様子で視線があちこちに行き、そのつらい現実から逃げ出すように床につい

た。社は父のことですこまで動揺し傷ついた様子の母を見ていつそ父への憎みを膨らました。

そして数日後、玄関にピシリと皺の無いスーツを着た男が現れ父のいる所へ案内すると言う。社はどこの誰かもわからないこの男は怪しい、信じられないと母を説得したが母はそれを見限だらけの狂気染みた目でそこへ連れていくよう頼み、それは受諾された。

母は社をほんの二、三日預かってもらえるように友人夫婦に頼んだ。勿論それは社にとって好ましくないものだったが母の狂気染みた目には逆らえなかった。

二日がたち、三日がたち、そして一年がたったが母は戻らなかった。社はぶつけようの無い怒りに襲われたがいつか母の戻ってくる日が来ると自分に言い聞かせた。そしてその年のよく晴れた夏の日母と父は帰ってきた。

死体で

死因は急性心臓麻痺社。社は母の死が理解できず棺おけから出して一緒に寝た。

一週間たち死体が腐敗臭を放ち始めたので友人夫婦は嫌がる社を死体から離し火葬場へと送った。半年ほどでようやく復帰した社は両親の情報を集めた。

二人とも死因が急性心臓麻痺なはずが無い。

あまりにも不自然な二人の死はどこか作を感じ、同級生が遊んでいる間社は必死で情報を集め、ようやく父が断った政府の研究施設が怪しいということが分かり更に詳しく調査した結果、どうやら父は超能力の発現に至る研究を偶然見つけてしまいそれが原因で攫われたらしい。それは家に残る資料からも明らかだった。

そして用済みになった父は母とともに処分されたわけだ。そして父

の口からは『全ての元凶はアレイスター＝クロウリー』と書かれた紙が見つかった。

社は決めた。

学園都市のトップであるアレイスター＝クロウリーを倒すためなら超能力者にでも何でもなつてやる。そして最後にお前は追い詰められる。お前が今まで考えもなかったザコによって……

＋　　＋　　＋　　＋

命令を待っているマウスはその無機質な目でジツとしている様子に社は興奮を覚えながらメスでその小さな前足を切り裂く。普通のマウスならこの時点で鳴き声をあげ逃げるか、あるいは噛むなどのアクションを起こすのが当然なのだがマウスは平気な顔でいる。

それどころか切られたはずの足はみるみる治っていく。これが彼の持つ超能力の恐ろしいところだ。自らの試みが上手くいって満足した社はマウスに命令を下す。

「学園都市中の排水路、裏通り、普段生徒が行かないところへ潜入し、情報を集めろ」

マウスは頷くと、窓の棧を伝い外へと抜け出した。

ピンホールカメラ

マウスの目を通じて得た情報は逐次社の部屋にあるTVに送られ、その情報の優先度に応じてTV下の主電源のランプが青（軽優先）（赤（最重要））に光るといふなんとも便利なシステムが完成されているのだ。ちなみにピンホールカメラの電池はマウスが動く時の振動によって充電される、これまた学園都市製の物なのでその点の心配は無い。既にこのマウスは学園中に三百匹ほど設置されていて、社が知りたい情報はいつでも入ってくといういささかやり過ぎな面

も否めないが社はこれも必要悪だと割り切って考えている。」

だが同時にこれで出来るのは情報収集だけであって実質的な戦闘力はゼロに等しい。能力者同士の決闘も間近で見たことがある社にとつては未だ大きな決定力が無いことが大きな悩みだった。

「いったいどうしたものか……」

レベル3かレベル4になれば話は違ってくるかもしれないな」

そんなことをぼやいてみると、ふいに外から声が聞こえた。どうやら誰かが怒鳴っているようで普段なら無視するところだがちょうど今やることもないので、喧嘩見物でも見て楽しむかという軽い気持ちでドアを開けたのが……間違いだった。

まず目の前にいる上条 当麻はまだいい。同じ寮だしここに帰ってくるのになにもおかしいことは無い。理解出来ないのはそれと向き合うように立っている赤髪でタバコを加えている黒い修道服姿の男、この手の人間とは今まで関わりが無く、またこれからも関わりたくないであろう人物がそこにいた。

「ああ、また一般人が来ちゃったじゃないか」

「社!？」

オレはこいつに用があるからお前はここから直ぐ逃げろっ!」

焦ったように叫ぶ当麻に社はますます困惑の度合いを強くした。何が何やら分からない社はとりあえず当麻にこの事情を聞こうとしたが、

「―巨人に苦痛の贈り物を」

修道服姿の男が呟いた瞬間一直線に炎の剣が生みだされ、男がそれを社へと叩き付けた。

それは触れた瞬間力タチを失い、辺りかまわず爆破した。熱波と閃光と爆音と黒煙が辺りに吹き荒れる。

「やりすぎたか、な？」

しかし修道服姿の男にとってはありえないことに、当麻にとっては当然なことに社を守るように突き出された右手が炎を打ち消したかのように社自身への被害は全くなかった。

社はどうやら発火能力者らしい修道服姿の男に明確な殺意を持たれていることは理解したが、当麻がどうやって先ほどの攻撃を受け流したのかは分からないはまだ。

当麻が男の生み出す炎剣を次々と片手で消し飛ばしながら男へとゆっくり歩いていく姿は普段見ているおちゃらけた姿とは違っていて、認めたくはないが少しかつこよかった。

男はゆっくり近づいてくる当麻に恐れをなしたか呪文のようなものを唱えだす。

「―世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ

それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。その名は炎、その役は剣。

顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ―ッ！！」

男の修道服が内側から溢れる力の奔流によってボタンが弾け飛んだ。炎の塊が服の内側から轟ッという音と同時に飛び出した。重油のよ

うな黒くドロドロとしたモノが芯になりそれを覆うように人型に炎が集まってできたいわば炎の巨人。

その巨人は鉄すらも溶かす高温の腕で当麻を抱きしめるかのように突進し、

「邪魔だ」

ボン！！と

裏拳気味に入った右腕が炎の巨人に当たると同時に爆散した。

社はようやくこの能力者との戦いが済んだと思いきや脱力しながら当麻に事情を説明させようとした……が背後でビュルンと粘性な液体が飛び跳ねる音が四方八方から聞こえる。

振り返ると再び炎の巨人が再生していた。

再び当麻が右手で打ち消そうとするが今度は当麻の右手の方がはじかれてしまった。当麻の右手がどうという原理かは分からないがどうやらもう当麻の右手は効果が無いらしい。

「ルーン」

社の耳が少女の声を捉えた。ドアに隠れて今まで見えてなかったらしく、そこには安全ピンで留められた白の修道服姿の少女がいた。敵対している黒の修道服姿の男とはまるで反対の白の修道服は淵が金糸の刺繍がほどこされていてとても『悪人』の姿には見えなかったが、本日二人目の修道服の人物に社は警戒したがそれも長くは続かなかった。

当麻が心配そうな表情でその少女を見ているということも大きかったが、その少女の姿が……あまりにも痛痛しかったからだ。

「『神秘』『秘術』を指し示す二十四の文字にして、ゲルマン民

族により二世紀から使われる魔術言語で、古代言語のルーツとされます」

全身血まみれだというのに、それでも少女の声はビックリするほど無機質でそれが更に悲痛だった。無機質な少女の話によると辺りに刻んだルーンの刻印を消せば目の前の巨人は消えるらしい。

しかし黒い修道服姿の男はそれが気に食わなかったのか、炎剣を作りだし炎の巨人を相手にしている当麻に向かい振り下ろそうとする。社はその光景にいてもたってもいられなくなり気づけば当麻を引っ張り手すりから飛び降りていた。永遠にも思える滞空時間が終わると同時に両足を衝撃が襲う。

運動神経の良い当麻は上手く受身をとったようだが社はそうでもないので無様に着地して足を痛めたのだ。

「ちよっ、当麻何故こんなことになったか今は聞かないけど後で絶対教えてね!」

「ああ。後で幾らでも教えてやるけど、今はあいつをどうにかしないとな!」

「あれ?その言い方だと何だか僕も協力するように聞こえるんだけど!」

「……手伝ってくれないのか?」

当麻はさも意外だとばかりに聞き返す。社は当麻のそういうところが卑怯だと常日頃から言っていたのだが、今日ほどそれを強く感じた日はなかった。

「同じように僕がピンチになったら助けてよね」

「おおっ！..!」

社
の
意
思
は
そ
れ
で
固
ま
っ
た
。

炎の魔術師との戦闘（2）と新たな出会い（前書き）

もっと主人公の悪さを書きたい！！

炎の魔術師との戦闘（2）と新たな出会い

「まさかこれ……全部か？」

「みたいだね」

ルーンがどこに刻まれているかは男の口ぶりからどこか分からないところに隠して刻まれているんだろうと勝手に考えていたが、床の上、ドアの前、消火器の裏から天井にまでどうとどうとテレホンカードぐらいの大きさの紙切れが堂々と貼っていた。ただその量が社の想像を超えていただけだ。

「どうする？」

当麻はこのような状況になっても悲嘆に暮れた表情は見せず、唯この現状からどうするかを冷静に社へと訊ねる。

学園都市中に張り巡らせたマウス達をここに集めればなんとかこのカードを全て回収することは出来るだろうが、集めるだけで二、三時間はかかってしまうだろうしそんな猶予はあの炎の巨人が与えてくれるとはとも思えない。それにいくらアンデッドとはいえ燃やされたりしたら活動するための肉体がなくなるのでこれからのためにここでマウス達を動かすのは痛い。正直、社に打つ手はなかった。

「うーん、とりあえずここにあるカードを剥がしてみようか？」

急に周りの温度が数度上昇するような感覚を覚えた社はその熱源へ当麻と同時にゆっくり顔を向ける。

「上条さ〜ん。何だか僕嫌な予感がするんだけど〜」

「雉旗さ〜ん。上条さんの不幸レーダーがそれは正しいと言っているぞ」

寮の一階部分の突き当たりの壁が赤熱し始め、まるでマグマのようにドロドロの塊へと変貌して行きついにその中から炎の巨人が現れた。日常の風景を切り取って、絶望と共に現れるそれはまさに悪魔。社と当麻は息のあった動きで通路をダッシュで駆け抜けエレベーターへ直行する。幸運なことにエレベーターはその階に止まっていたので、社は荒い息をしながら先行く当麻が押してくれている開閉ボタンに感謝しながら駆け込んだ。

「早く閉めて!!」

「分かってる!!」

閉まり始めた扉の奥に炎の巨人がこちらへと手を伸ばそうとしたがそれより一瞬早く扉が閉まった。無意識のうちに膝が震えていることに気づいた社は自分が始めてリアルな死を想起させる存在に出くわしたのだと理解した。手のひらも同様に冷や汗でジトツとした嫌な感触を帯びていたので、その汗をズボンで拭い去ろうとしたところ手の平にクシャツと紙のような物が握られていたことに初めて気づく。

握っていたことによって多少皺が出来ているがそれは先ほど剥がしたルーンの刻まれた紙だった。だが冷や汗だらけの手に包まれていたこともあって紙のインクが滲みその記号とも文字ともいえないようなルーンは元の美しさを失っているように見える。

「あー！！」

あんな奴に勝てる訳ねーじゃん！

親が勇者という理由だけで魔王に立ち向かえって言われる位無理だつー！！」

「……当麻、確か火災報知器って僕達の下の階にあるよね？」

「そうかつー！スプリンクラーであの炎の巨人を倒すってことだな」

さすがにそれは無理だろうと社は思った。

少なく見積もってもあれは千度以上の炎の塊だ。焼け石に水どころか太陽に水といったほうがいい位温度差がある。

「当麻には一番良い役をあげよう」

当麻は社がこの手の笑みを浮かべて案を出す時は大抵誰か（社以外の人間）が犠牲になることをしていたので素直に喜べなかった。

イノケンティウス

上の階にいる当麻が『魔女狩りの王』をあつさり四方八方へと吹き飛ばしたのを、下の階のベランダから体を取り出して見ていた社はスプリンクラーの雨に濡れながら満足そうに眺めていた。

当麻のように元々あまり戦闘が得意ではない社は『印刷された文字はスプリンクラーによって溶けるのではないか？』という案を当麻にぶつけ、自分には全く危険の及ばない『火災報知器を作動させる』という仕事を選んだ。勿論当麻が火災報知器を作動させる役目を名乗り出る可能性もあったが性格的にその可能性は低かったであろう

し、だいたいあの変な右手があれば大丈夫かという気持ちもあった。だがやはり一番の理由としては自分の保身が大きいだろう。それが結局のところ雉旗 社の性格だった。

何はともあれようやく危機は済んだが、そうなるにあの男の能力に興味が湧いてくる。

あの炎の威力からして発火能力者かと考えられるが、レベル4と5にあのような能力があるとは聞いたことが無い。それにあのルーンのカードが炎の巨人をつくりあげていたようだが、あんな小さなカードがあればどの熱量を生み出すとは考えにくい。

社が今までマウスから得たどんな情報にもあれを科学的に説明できるものはなかった。

唯一のキーワードはドアの外から聞こえた『魔術師』という言葉

果たしてそんな絵空事が存在するのだろうか？

存在するのだとしたら……それを是非デニイレタイ。イマハ、チカラガホシイ

そんなことを考えている間に当麻は血だらけのシスターを抱えて飛び出て行ってしまったようだ。死んだら欲しかったのでそれを当麻に伝え損ねたのは失敗だったと社は深く後悔した。

寮の部屋にそのまま帰ろうとしたら火事騒ぎで人が集まりかけていたので、下手にジャッジメントやアンチスキルに絡まれたら面倒だと考えた社は騒ぎが収まるまで外に行くことに決めた。勿論行くあ

てなどあるはずもないのでフラツとあちこちを見て回る。

ケバケバしい色や光、会話をするにしても大声で話さないと伝わらないほどの騒音が溢れるゲームセンターは例え外と数十年以上技術格差がある学園都市とはいえ変わらない。ゴキブリと同じで何十年たとうが、何千年たとうが、変化が見られないのかもしれないなど失礼な例えを脳内で繰り返している社も結局はここに来ているのでそんなことを言えるような身分ではないだろう。

店内は大型サイズのゲーム筐体が並んでいて、夏休み初日ともなるうものだから全てのゲーム筐体が埋まっているのだらうと思ったが、予想とは違いあたりはガラガラだった。自分のお気に入りゲームを探して奥へ奥へと進む内に人の騒ぐ声が聞こえてくる。お目当ての射撃ゲームはまず第一に才能と、後は多少の演算能力もいる学園都市のオリジナルで、対戦も出来るのだがその難易度の高さから普段はいつも開いているはずなのだが……

今日に限ってその台は多数の人ゴミに溢れていた。もしかして全員順番を待っているのかと考えたがどうやらそのほとんどが観客らしい。人ごみを押し分けてそのプレイヤーを見に行くとそれは制服で確認したところ常盤台中学の学生だったが、一瞬社は自分の目が錯覚を起こしたのだと考えた。学園都市でも五本の指に入るほど有名な私立の名門校のお嬢様がこんなところにくることは『新種のラクダが北極で見つかった!』と同じくらい信じられないことだからだ。

その少女は『おんどりゃー』『チツ、外したか』など男らしいセリフをはきながら観客を魅了する腕前で現れる敵を倒していく。そしてこの店で最高の記録をたたき出すと、観客の賞賛を浴びながら満足そうに店を出ていき、観客も名残惜しそうな表情を浮かべ帰った所でようやく社はその席につきゲームを開始した。

社は何の感慨もなくただ敵を打っていく。だが全てヘッドショットを決め、打ちもれもなく、巧妙に隠され、更に時間経過とともに移動するという鬼畜な最後のボスの弱点を狙いパーフェクトを達成した。少しは充実感を得られたがまだ家で動物の解剖をしている方がましだったなど、席を立とうとしたが、

「何よ……これ!？」

ゲームに集中していて背後にいる先ほどの少女に気づかなかった社はその行く手を阻まれた。

「変ですねー機械が故障したのかもしれませんが。じゃっ」

面倒な気配を感じた社は適当にごまかして帰ろうとしたがどうやら少女はそれをよしとはしなかったようで……

「へー、私は忘れ物を取りに戻ってきた時にあんたが余裕を浮かべて全弾ヘッドショットするところを見たんだけど」

「ハハハハ」

「……ちなみにあんたの名前は？」

「雉旗……社です」

今日という一日の濃いことに社は半ば諦めの眼差しのまま答える。

「私は御坂 美琴。ちょっとあんたに話を聞かせてもらっわよ」

雉旗 社は内心舌打ちをしたあと口に出すのも躊躇われる暴言を吐きそつな気持ちでいっぱいだったが、ニッコリと微笑み「ハイっ！

「!とかなりいい返事をした。

研究者の狂気

どうしてこうなった？

今日初めて会ったばかりの少女とこうして一緒にファミレスで食事をとっている状況で社はそう思う。魔術師らしい男と命がけのバトルをすることだけでも一日の濃さとしては充分だというのに、その上更に見慣れぬ常盤台中学のお嬢様とご飯を共にするというのは一日の濃さとしては過去類を見ないようなことだろう。お嬢様だという割には、股を開いて食べる食事のマナーに疑問を抱きかねないが、つまり社は極度に疲れていた。

基本的に人との接触の際には猫を被っていることを本人も自負しているので、学校でも長時間演技を続けているのだが今日という日は社の許容限界をいろいろと超えているのであった。

「それで……あなたは学園都市の第三位に位置する超電磁砲レールガンの美琴さんということは分かりましたが、どうして僕達はここで食事を一緒にとっているんでしょう？」

言葉の節々にイラついた感情が表れていたことを自覚した社は直ぐに持ち前の演技力で立て直したが、どうやら美琴はそんな彼の様子に気づかなかったようでホッと安堵の息を漏らす。

「うるさいわね。」

仕方ないでしょ、お昼何も食べてなかったんだから！」

美琴はそう言うと、さすがに場の空気が悪くなったのを感じたのかナイフとフォークを下ろし社と向き合う。

「あんた何者？」

あのゲームはかなりの演算能力が必要よ。名前は？能力名は？レベルは？」

「そんなに一度に聞かれまして……」

「それっ、止めて!!」

突然言葉を遮って美琴が叫んだ。社は意味もわからずただ困り顔で美琴の次のセリフを待つ。

「その敬語!!」

あんた私より年上でしょ。もっとしっかりしなさいよ」

年上だとわかっているというのにその態度はある意味賞賛に値するな、と考えていた社は当然そのことを口に出さない。美琴はそんな社の態度から何か邪なことを考えていたと推測して頬を膨らます。

「すみません。でもこれが僕の普通なんです」

心の中で一部例外はあるけどと付け加える。

「はあ、じゃあそれは仕方無いとして、あんたのこと教えて」

未だ納得がいけないような表情だがとりあえず彼女は話を進ませる。

「僕の名前は雉旗 社、レベル1の念動能力サイコキネシス使いです。」

「嘘でしょ！？あのスコアで演算能力は少なくともレベル3はないとおかしいわよ」

社は美琴のセリフに驚かされた。たぶん能力者にしか分からない感覚的なものだとは思うが、レベル3だと人間ぐらいの大きさならアソビ化できるだろう。ここ最近はずっと改造マウスにとりかかっていたから自分の気づかないうちにレベルが上がっていたのかもとは推測する。そしてそれは社が望んでいたことだった。

「でも事実そうなんですよ……」

「そういえばあいつもレベル0って言ってたっけ」
ボソッと美琴が呟く。

「えっ、何ですか？」

よく聞こえませんでしたけど」

「き、気にしないで！ それよりこのうどんおいしいわね」

「……それはパスタですけど」

その後もやけにてんぱった様子の美琴に社はどうリアクションをとればいいのか分からず、なあなあな空気のまま食事を終えた。会計もさすがにお嬢様学校の生徒とは言え、女の子に出させる訳にもいかなかったので社が払うことになり、その原因である美琴は気まずそうに笑うばかりだった。とは言えたった数千円で美琴を追い払えたことに社は去り際思わずガツポーズをとりそうになったが、美琴の前だったのと時代錯誤という理由で断念する。

帰り道、ふと当麻がどこかへ連れて行ったシスターの事を思い出してレベル3になっっているかどうかの実験を含め、死体が必要なことに気づく。マウスの死体は学園都市にある研究施設の裏のゴミ箱で簡単に回収が出来るが、人間の死体ともなると相当難易度は高くなる。学園都市の裏はそうとう汚いこともやっている所以でゴミとして人間の死体も出るだろうが、やはりそれは内部で処理されるし、手に入れたとしても既に体がボロボロでアンデッドとして使い物になりそうもない。マンガやゲームのように眼球は飛び出て、見目麗しくないものを造るのは創造主として認めないし、体液やら何やらで部屋のカーペットを汚されるのは社が一番嫌悪することだ。アンデッドは仮死状態と生きている状態のちょうど真ん中あたりに位置する生命状態で、腐ることなく、マウスの実験から分かったことに組織の代謝も低下するが時間をかければちゃんと爪や毛も伸びる。今の所寿命は確認できないがそれも直に分かってくるだろう。

異能といわれる能力者の中でもさらに異能な能力である『アンデッドメイカー 亡者復活』はパーソナルリアリティが確立している社自身ですらまだ理解しきれない能力なのだ。レベル4やレベル5になれば命令や操れる生き物の死体の大きさも変わってくるだろうが、どうもこの能力はそれだけな気がしない。社は久しく感じなかった期待に胸を膨らませながら、帰途を急いだ。

隣の部屋に明かりがついてなかったのでどうやら当麻は留守のようだ。社は少し肩を落しながら自室に戻る。TVの主電源のランプが赤く光っていたのでマウスが情報を集めてきたと分かった社はT

Vをつけた。

『ジャッジメント
風紀委員ですの！』

ツインテール姿の少女、ジャッジメントが能力を悪用した連中をとつちめているマウス達がよく拾ってくる光景。元々の知能が足りないの、マウス達はちよつとした能力者同士の戦闘や拳句のはてには恋人同士のキスシーンまでも情報として拾ってくる有様だ。

マウスの自主性にまかすだけでは無くもう少し命令を細かく与えるべきと後悔する社だったが、その中で見覚えのある顔があった。チンピラの一人だが、以前はせいぜいレベル2の風力使いだっただはすなのに上位のレベル3並みの実力になっていた。いきなりレベルが上がることも無いこともないが、それは社のように日々能力の研鑽を続けた人物にこそ有り得ることでどう見てもチンピラはそのようなタイプには見えない。どちらかと言うと自分より弱い者を見て慢心し自分の力を見せ付けるタイプだろう。そして最後にその男の間がジャッジメントに手錠を掛けられながら「レベルアップを使ったのに！！」と悔しそうに叫んだ。

「これはなかなか面白いことになってきたな」

学園都市の都市伝説の中に使うだけでレベルがあがる幻想御手がある。他にも脱ぎ女や、虚数学区があるが所詮都市伝説なのでその信憑性は薄い。

しかし、今の男のレベルはレベルアップを使ったと考えたほうが納得できるのも真実。

社は部屋の中をウロウロしながら考えたが、結局レベルアップを手に入れて確かめることしか現状を打破する手段がないという結果に落ち着いた。社はニヤニヤと寒気がするような笑みを浮かべ、マ

ウス達に機械を通じて何事かを命令するとベッドについて休んだ。

それから三日後、目覚めて直ぐにTVをじっと眺める社がいた。いかにも暇な学生らしくアニメに熱中するのではない。当然昨日の夜に新たに命令をしたマウス達の得た情報を確認しているのだ。知りたい情報を得るには時間がかかるだろうと社は考えていたが、その情報は幸運にも予想以上に早く社の元に届いた。

社が命令したのは『スキルアウトや低能力者のたまり場で張れ』

レベルアップパーを手にいれる手段やどんなものかさえ分からないので、マウスを配置して適当に泳がせておけば分かるだろうと樂觀視はしていたが、まさかレベルアップパーがただの音楽だとは考えもしなかった。レベルアップパーは裏サイトにあるらしく、情報を知る者では無いとたどり着けないだろう。

社は有名な音楽端末にレベルアップパーをダウンロードした後、少し逡巡を見せる。何の副作用も無くレベルが上がる訳は無いし、本当に効くかどうか分からないものを嬉々として使うほど……社は狂っていた。逡巡を見せたのは彼の常識人としての最後の抵抗だったのだろう。

研究者として狂っている事は望ましいとされるが、彼は父親からその狂気を見事に受け継いでいた。社はイヤホンを耳にあて……再生ボタンを押した。

A I M パーストの利用価値

たくさんの学生達が行き交う街、学園都市はその日も賑やかだった。夏休みだということもあり街中が活気付いているような中、一際社は普段の社交辞令染みた笑顔ではなくまさにニヤニヤという表現がピッタリな表情を浮かべている。すれ違う人が皆そのあまりの不気味さにアンチスキルやジャッジメントを呼ぼうかと考えるほどだ。

「素晴らしい！」

社は確かにレベルアップの効果を実感していた。頭が以前とは比べようもないほど働きマウス達に以前より複雑な命令を下すことも出来たが、何分マウスの動きだけでは物足りないしもっと大きな物を動かしたいという気持ちが強ク寮から飛び出たわけだ。

そういう訳で久しく気分の良い社は死体を探しに出たわけだが、機械化された学園都市で人以外の死体はそんなに簡単に手に入るものではない。

気づけば人が滅多に立ち寄らない学園都市の出口近くまで来ていた所で、ポケットに入っている携帯が振動しているのに気づき携帯を開く。

普段TVを通じてマウス達の報告を受け取っている社だがそれではいざという時、間に合わなくなるので最重要情報を示すレッドランプが点いた場合TVと同時に携帯にその位置情報を送るように設定をしていたが、実際それを一度も使う機会がなかったので驚いた。

動揺を押し殺して携帯を開いてGPSを使つとそれが今自分がいる

場所とかなり近いことに気づく。

「いったい何が……あれだな」

近くの高架にはアンチスキルが乗っている車がゴロゴロと転がっており、黒煙を上げているのが見え社はそれが原因だと把握した。そして途中で落ちた高架の先には生き残ったアンチスキルが高架下に向かって銃を構えていていかにも物騒だ。

最新武装で構成されたアンチスキルだがその実、使う相手が学生であることが多いので武器のほとんどが非殺傷なはずのだが、銃の形から入っているのは実弾であることが分かる。

だが体を乗り出しアンチスキルが敵対する何かを社の目が捕らえた時納得した。

マルチスキルを活用して木山がレベル5の美琴相手に互角、いやそれ以上に高度な能力合戦をしていて、あたりは美琴の起こした電撃や木山の空き缶を使った量子変速による爆破による被害が凄まじかった。

とてもではないが自分の入り込む余地がないその戦いは、油断した木山に美琴が抱きつき電気を流したことによってすんだかのように思われた。

しかし、木山が美琴によって記憶を除かれそれによって感情が高ぶった彼女が叫んだ時

怪物が生まれた。

宙に浮かんだ胎児のような外見のそれは目を開くと、金きり声のよ
うな悲鳴を上げる。

それに伴い社を酷い頭痛と悪夢が襲う。

常人では耐えられず意識を失うであろうそれを笑みを浮かべながら
社は耐えた。

頭の中がドリルで削られるような痛みがあつたがそんなことより興
味深いモノがあつたのだ。

美琴の雷撃によつて傷付けられたAIMバーストはその以上な再生
速度で瞬時に元通りになり、あげくの果てには木山のようにマルチ
スキルのようで多様な能力で攻撃する。

更に、攻撃を加えるごとに大きくなっていく特性すらも併せ持つそ
れは社にとつて目指していた理想の生命体でもあつた。普段彼が隠
している研究者としての本能が理性を打ち破り、自身が恍惚とした
笑みを浮かべているのに気づいていたが表情筋は全きう事を聞いて
くれなかつた。そのAIMバーストの製作者であろう木山には後
でゆっくり話をきくことにして社は原子力発電所の方向に近づいて
いる怪物の元へ駆け出した。

普段あまり動かさない体を必死で動かしてようやくAIMバースト
の元にたどり着いた時には既に、美琴がAIMバーストを高速で砂
鉄を振動させることによつて切り裂いている様子だつたがそれでも
AIMバーストは再生を続ける。ますますこの生物にほれ込む社だ
つたが、その時音が聞こえた。

それはどうやら何かの音楽のようだったが、目の前の研究対象意外
に心を動かされたくない社はポケットから耳栓を取り出して観察を
続ける。

「ちよつ！？ あんたここで何してんのよ！ さつさと避難しなさい！」

美琴は突然フラツと現れた社に当然のごとく驚き、警告するがAIMバーストの美しさに見惚れた社にその声は届かず、最終警告として電撃を社の前方に飛ばしたがこれも応えた様子はない。

（つたくもう、どうなっても知らないから！）

これ以上この化け物を放っておけば被害は目の前の高校生だけでは済まされない。原子力発電所があゝの怪物に破壊された場合はあたり一帯が放射能で汚染されてしまうだろう。それだけはどうしても避けなければいけなかった。

美琴はありつたけの電撃を掌に集め醜悪な怪物目がけ放とうとした。その時どこからかメロディが流れ出す。それは最初弱弱しい音量だったが途中から拡声器を使い出したのか、徐々に音が大きくなる。自らが音楽に集中してしまっていた事に気づき、我にかえってAIMバーストと対峙する

が時既に遅し。AIMバーストの触手に足首を絡みとられ宙吊りにされてしまった。

そのままAIMバーストは美琴目がけ触手を伸ばしてくるが電撃で迎撃する。

（くそ、幾らやっても直ぐ再生するんじゃない意味が……）

電撃で破壊された触手は直ぐにでも再生し襲いかかってくるだろうと身構えるが、美琴の予想は外れ触手は再生する気配がない。

「この曲……治療プログラム！？ 初春さんやっただんだ！」

自らの触手が再生しないのを不思議そうに眺めるAIMバーストを見て沸々とやる気が出てきた。元々、美琴は性格上やられっぱなし

というのはありえない少女だ。

「悪いわね。これでGAME OVERよ!!」

直接電撃をAIMバーストに流すと、AIMバーストはたくさんの赤ん坊がいつせいに泣き声をあげたような叫び声を上げ地面へと倒れる。

ようやく倒れた獲物を前に美琴が一息つくこうとすると、
「気をぬくな！ まだ終わってない！」

追いかけてきただろう白衣の木山先生が叫ぶ。

「ちよつ、何でこんな所に!？」

慌てて美琴がそれに反応すると倒れたはずのAIMバーストが再びゾンビのように立ち上がる。美琴の電撃で皮膚は焼けただれ、生物としての行動はもう出来ないはずなのに……だ

「そんな!？」

「ネットワークの破壊には成功しても、あれはAIM拡散力場が生んだ一万人の思念の塊。

普通の生物の常識は通用しない!!」

「話が違っじゃない!! だったらどうしろって……!？」

「……核が。力場を固定している核のような物がどこにあるはずだ。それを破壊すれば……」

社の目の前で御坂 美琴の手によって至上の芸術が壊されていく。

誘電力場によってそのフォームは端から消しくずのように溶かされていき、通り名ともなっている『超電磁砲』の圧倒的な威力によって三角柱の核をバラバラにされたAIMバースト。

その様子を社はただ見ていることしかできなかった。

単純に戦闘力のない自分ではこの戦いをどうすることも出来ず、現実と空想のフィルター越しにその光景を見続けることしか……

社は悔しかった。

——自分に届かない場所でまた何かを失うのは——

——父と母の時のように何も出来ない子供でいるのが——

社はアンチスキルにこの事件を説明しに向かった美琴が帰ってくる前にその場を離れた。

手にAIMバーストの核と肉片を携えて

——あの時に無くて今にある、そしてこれからの為に不可欠な力。それは超能力——

彼の利用価値

あの後、アンチスキルからの事情聴取を避けるために人通りの少ない道を選んで歩いたため寮の近くまで戻る頃には既に日が暮れていた。

そしてまるで誘蛾灯に誘われる虫のごとく社は二十四時間営業のコンビニに入り、思いつめたようにカップラーメンや保存の利く食品をカゴに詰める様子は鬼気じみている。

店員もその様子にビクビク反応し、出された小銭が足りないことを注意すべきか迷うほどだった。

買い物を済ませると寮の自分の部屋へ真っ直ぐ向かう。

何重にも鍵を掛けられた秘密の部屋へ入るとようやく気が抜けたように膝を突く。両手に抱えたパンパンに膨らんだビニール袋が手に食い込んで少し痛かった。

今更ながら美琴たちの闘いがどれほど危険なものだったかを思い出し、汗が止まらない。

べとつくＴシャツを脱ぎ捨てようとしたところ途中で何かに引っかかる。

一度Ｔシャツを脱ぐのを中止して確かめるとそれは自分の肩にぶら下げいつも身に着けているバックだった。中はメスや懐中電灯、消毒液、包帯などがいつも入っているのだが今日は少し様子が違うように、何かの体液でうっすら濡れていた。

社はそれを見て満足感で一杯になる。久しく感じなかったその感情に奇声を上げそうになるほどだったが、そんな声をもしも誰かに聞こえてしまったら自分の今まで積み上げてきたキャラが台無しにな

つてしまう。

社のその考えは全く杞憂と言っても良い。

他のクラスではおおよそ社のイメージ通りの良い子ちゃんキャラで通っていたが、上条、土御門、青髪ピアスたちのクラスでは直接本人には言わないが変人キャラと理解されていた。

そんなことを思いもしない社は慌ててわざとらしく二、三度咳払いをして平静を保とうとする。なんとか落ち着いたところで作業台の上に問題のバツクの中身をぶち空けた。

グロテスクな肉片がグシャツと嫌な音をたて、もう一つはバラバラになったA I Mバーストの核がカランと金属音を立ててライトで照らされた作業台に転がる。

「ふゝむ。やはり興味深い。そもそも多細胞生物の特徴と単細胞生物の核を持つのは生物としてどうなのか？」

開発者の木山に詳しく事情を聞けなかったのが少し惜しい気もしたが、A I Mバーストを見たあの様子からだと本人も分かってないことが多いようだ。

「まあ、僕があなたの仕事を引き継いであげればいいだけの話だ」

社は肉片の中央にバラバラになった核を置き能力を発動させる。するといつものように紫色の炎が肉片と核から上がった。

レベルアップーを使ったので今の自分のレベルはおそらく3〜4。マウス以外の生物をアンデッドにするのは初めてだったが何とかする自信はあった。

だが予想を反して紫色の炎を上げ始めて直ぐに体が猛烈な虚脱感に

襲われた。

どんどん力が目の前の物体に注ぎ込まれているが、それでもまだ足りないと言わんばかりに貪欲なまでの食欲を見せる。体がキリキリと悲鳴を上げて脂汗が止まらない。

終に体を襲うだるさと痛みによって社は倒れてしまった。

一時間のランニングを終えたように息がきれ、それに唯でさえあまり運動をしない社の体力は既に限界を超えていた。

だが社の瞳は諦めたそのように濁ってはおらず、ギラギラと輝いてさえている。

最初の頃はマウスのアンデッドをつくる時でさえ軽い虚脱感があったが、それは今ののようにレベルが高くない時期だった。そんな自分がここまで消耗するということは、やはり目の前の生物は美琴との戦いで見せたような理想の生物であるという線が強い。

そしてここで力尽きてしまつては理想の生物のアンデッド化はおろか、アレイスターを倒すことは出来ないだろう。唇を噛んで必死で耐え、三十分、あるいは一時間かかったかもしれない。紫色の炎を上げ続けた肉片はその火を弱くし始めたが最後の抵抗でその力は増し、天井にまで届かんばかりの火柱を上げた後ようやく火が消えた。

「よ……、ようやく終わってくれ……たか」

疲れた体を作業台のイスへ無理やり引っぱり上げて作業台の上を恐る恐る覗くとそこには生命の神秘があった。消しゴムぐらいの大きさの胎児。背中から羽根のように二本の腕が伸び、細長い触手のようなものが五本生えているが最も特徴的なのが頭に浮かんだ天使の輪っかだ。それは美琴と闘い始めたばかりのAIMバーストをそのまま小さくしたようである。

「ギユワ〜〜、ギユワ〜〜」

その産声をあげた生物にたいして社は思わず、

「か、可愛い」

「……いや、いかんいかん。興味は尽きないが（いろんな意味で）細胞のサンプルをとらねば」

社はおっかなびつくりしながら胎児の皮膚を鉛筆でマークしてそれに沿ってメスを入れる。

胎児は泣き出すことも、特に抵抗することもなくジツとしているがいつ暴れまわるか分からない。さつさと切り抜きピンセットで慎重に培養液に入れ無菌状態の培養器へ入れる。

本当は皮膚を細かく刻んだり、様々な作業が必要になるのだがこの胎児は生物としての常識がほとんど通用しないのでこれで大丈夫だろう。

今も切り抜いた部分がみるまに再生していく。自分の良心の呵責を返してほしい。

「ギユギユツ
ッ」

「寮はたしかペット禁止だったな。残念だけどここでお別れだ」

ガンとショックを受けたような表情を浮かべるAIMバースト。慰めるように軽く人差し指で撫でるとそうはさせじとパカッと口を開け社は指を噛まれた。

「冗談だから怒るなよAIMバースト。そういえばいつまでもAIMバーストと呼ぶのも面倒だな。AIM、アイム、アイモが一番し

「つかりくるからそれで決定！」

完全にA I Mバースト、改めアイモの意志は完全に無視である。社に大事なのはあくまでアイモの能力であり細胞なのだ。

「これから働いてもらうよ、たっぷりね」

「ギュー〜」

アイモの叫びは狭い部屋内でいつまでも響いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1886p/>

とある『亡者復活』＜アンデッドメイカー＞の日常

2011年2月23日01時51分発行